

言ったのです。『それがあなたよ』と。おかしいと思いつつも（親が指差しているのは鏡の中の子であって自分ではないのに？この見覚えのある子は鏡を見ていない時にはどこにいるのだろう？鏡以外の処で見かけた事は一度もないような気がする？）何度も言われるうちにあなたはそれを受け入れた（母親の容認の目線によって同一化させた）のです。そしてその後は引き返せなくなるのです。この鏡の中の顔と結びついたデタラメな物語こそがエゴです。今、社会では本当の自分とエゴを混同する事が普通になっていますが、エゴとは幼児期に身につけた自動反応であり生まれた時には存在しません。関連づけをしながら肥大化させたのです。でも多くの方は自分とは自分の思考だと思っています。ならば無思考状態の時の自分（思考が起こっていない事に気づいている意識）とはいったい誰なのでしょう。

## 自分とは本当は誰なのか？

金沢区 <sup>まつ</sup>松 <sup>せ</sup>瀬 <sup>かん</sup>観 <sup>おう</sup>翁



赤ん坊の時、私達は公的自己（パブリックセルフ）には気づいていませんでした。顔がなく（自分の顔を自分で見る事はなく）私的自己（プライベートセルフ）だけの存在で、言葉を使って表現する事はできません

でした。子供時代、私達は公的自己（他人が見る自己）に気づくようになります。自分自身を他人の目を通して見るようになります。同時に私的自己を見失い始めます。大人になると私達は公的自己と一体化し他人が私を見るように自分自身を見るようになります。鏡に映る自己を自分だと信じて疑わなくなりました。この段階で私達は自分の本質を否定します。そして何かもうまくいっていない、何か大切な事が欠けていると感じています。鏡に映る自己というのは他人が見る自己であり第3人称（対象）であって第1人称（主体）ではありません。鏡に映る自分を本当の自分だと思うようになった理由は幼い頃、鏡に映る自分を見た時にたぶん母親が

自分の指を自分の前に持ってきて、他人があなたの顔を見る場所から自分を指さす時、何を見るでしょうか？あるいは何を見ないでしょうか？自分の記憶や他人があなたについて言う事に頼らないで見て下さい。自分の頭が風景の一部として見える事はありません。頭が存在すると思われる場所から下に腕や胸や脚が見えます。もちろん私には頭があります。でも記憶と想像と他人の話を除けば頭はありません。顔もないので目も耳も鼻も口もありません（般若心経における無目耳鼻舌身意）自分に見えている自分には頭がありません。頭があるというのは他人の目を通して見ていると言う事です。私達は自分自身を第1人称ではなく第3人称で思考を通して経験しているのです。自己が他者が見ている世界を自己の世界だと思っているのです。自分が見ている事よりも他人はそう見ているに違いないと考えている事を優先しているのです。自分の考えている事より自分が本当に見ている事を優先してみましょう。すると自分とは本当は誰なのか？という事を思考の外側で見る事が可能となります。頭がないところを見る

時私は空っぽさを見ます。そこは静寂（意識はあるが考えていない状態）な開かれた空間（虚空：void）であらゆるもので満ちています。感情や思考などが絶えず表われては消えていく空間です。

私達は事物ではなく張り付いた表象を見ています。リカちゃん人形の素材はビニールでリカちゃんと言う表象が張り付いています。私達はビニールに注目しているのではなく、リカちゃんの姿形と言う表象を見ています。相手にしているのは表象であって事物ではないのです。もし事物を見ているのならリカちゃん人形を見てもビニールに関心が向かう筈です。事物から表象を切り離すと表象は独り立ちします。興味を向けた事物と自己同一化する事で私意識は存在するので、事物から表象を分離した後、表象から私を分離させると私意識は器をなくし成立しなくなります。スクライミング（水晶透視）とは事物から表象を切り離し、エーテルに意識を乗せ替える行為です。鉦物の高自我と人間の低自我は同じ振動密度（H96）で共鳴するため、自分の低自我（エーテル体）に働きかける事ができるのです。肉体の感覚を土台とする感情や思考から、エーテル体の印象を土台とする高次感情、高次思考へと意識を乗せ替えるのです。本来の人間とはこちらの方なのでありますから。

私が何であるかは観察者からの距離によって違って見えるのです。少し離れた場所からあなたが私を見る時、私は人間として見えます。でもあなたが私に近づいてくれば、私は皮膚細胞、分子、原子へと置き換わって見えます。逆に私から離れていけば人間としての姿は消え、町、大陸、惑星へと置き換わって見えます。このように私達は多くの層としての自己を持ち、それは分割する事のできない自己の一つのシステムです。自分と自分を含む空間に途切れはなく分離した自己はどこにも存在しません。自己から離れて存在するものなど何一つない事（非二元）が分かります。私達は靈的経験をしている人間なのではなく、靈的存在である私達が人間を体

験しているのです。スピリチュアルを謳っていても否定性が残存しているとミイラ取りがミイラになってしまいます。いわゆるスピリチュアルエゴで、自分対他人を強調するもので個別性を超えるのではなく分離を強化しています。空間自体にはこれと言った特徴はなく無と同じように見えます。でも出来事が起こるためには空間が必要です。空間とはあらゆるものに対する受容能力です。自分がそう見える外見と一体化する時、肉体の中に自己がいると考えます。するとストレスや苦痛を感じますが、自己の受容能力の中に肉体があるのを見る時、私達は内なる聖地を発見しストレスや苦痛に影響されなくなります。この解放されている聖域は源泉にして容器なのです。私が世界の中にある（第3人称）のではなく、世界が私の中にある（第1人称）のです。エゴが自己証明として利用するものには所有物、職業、学歴、知識、ルックスなどがあります。そのどれもが本当の自分ではありません。遅かれ早かれ手放さなければならぬ日が必ずやって来ます。死は本当の自分ではないものをすべて剥ぎ取っていきます。第1人称単数現在形の存在とは肉体が死ぬ前に死ぬ事であり、永遠無限の至る所に存在する生まれる事もない死ぬ事もない私です。ノウボウ・アキヤシャ・ギャラバヤ・オン・アリキャ・マリボリ・ソワカ（虚空蔵求聞持）人は人、吾はわれ也、とにかくに吾行く道を吾は行くなり。

『ソ、ソ、ソクラテスカプラトンか、ニ、ニ、ニーチェカサルトルか、みんな悩んで大きくなった（大っきいわ大物よ）俺もお前も大物だあ』

#### 参考文献

- さとりをひらくと人生はシンプルで楽になる（エックハルト・トール 著 飯田史彦 訳）
- 心眼を得る（ダグラス・ハーディング 著 由布翔子 訳）
- 今ここに死と不死を見る（ダグラス・ハーディング 著 高木悠鼓 訳）
- 死後を生きる（松村潔 著）
- 水晶透視ができる本（松村潔 著）

私達の本質とは何か？ (リチャード・ラング  
You Tube動画1A～4B)

Star People Vol.34-36 (魂の分光学について:  
半田広宣)

誰でも悟りプロジェクト (やまがみてるお  
ホームページ)

Resonanz360 塩人間の海底探検プロゲ  
(ホームページ)

The Headless Way (フェイスブック)

哲学の道の石碑：西田幾太郎

ソクラテスの唄 (サントリーゴールド900の  
CM) 作詞：仲畑貴志・歌：野坂昭如

